

意外にしぶとい円安、持続性をどうみるか？

今 月のドル円は月初に行われたFOMC後のパウエル議長発言が非タカ派的と受け止められたことで一旦1ドル128円台に下落したが、その後は上昇基調に転じた。米国の雇用・小売統計が好調な結果となったうえ、CPIなどの米物価指標が予想より上振れたことで、早期の米利上げ停止・利下げ開始観測が後退、ドル高圧力が強まったためだ。この結果、足元では134円台後半と約2カ月ぶりの円安ドル高水準を付けている。なお、今日14日に次期日銀総裁人事案が国会に提示され、経済学者の植田和男氏が総裁候補に指名された。事前報道後に緩和修正の思惑から一時円高が進んだものの、直後に植田氏が金融緩和継続に前向きな発言をしたこともあり、今のところ影響は限定的となっている。

今後も米利上げの継続と日銀の緩和修正を巡る観測のバランスがドル円の行方を左右する。当面は両テーマを見定める時間帯となり、方向感が出にくいとみている。一方、米利上げの行方には不透明感が残るものの、既往の利上げ効果が物価の抑制に働くことで5月には打ち止めとなり、先々の利下げが織り込まれていくことでドル安圧力が強まっていく可能性が高いと見ている。日銀が緩和修正に動くのは4月の新体制発足後2~3か月してからと予想しているが、その間も市場では緩和修正観測が円高圧力として燻り続ける。従って、3か月後には130円をやや下回る水準まで円高が進むと見込んでいる。

1ユーロ141円台で始まった今月のユーロ円はややユーロ高に振れ、足元は143円台前半にある。日銀の緩和修正観測に伴う円高圧力は燻っているものの、暖冬を受けてユーロ圏の景気後退懸念が後退したうえ、ECBが利上げ継続姿勢を崩していないことから、ユーロ高圧力が優勢となっている。今後も日銀の緩和修正観測が燻り続ける一方、5月にはECBの利上げが打ち止めになり、利下げ開始に市場の目線が移ることでユーロ安圧力が高まると見ている。3か月後の水準は140円弱と見込んでいる。

0.4%台後半でスタートした今月の長期金利は若干上昇し、最近では0.5%の節目に張り付いている。日銀の緩和修正観測が燻り続けるなか、利上げ長期化観測に伴う米金利上昇が波及した。一方、日銀がオペによって許容上限に抑えていることで0.5%での膠着状態となっている。今後も、日銀の緩和修正観測が金利上昇圧力となるが、既述の通り、修正は新体制発足後しばらくしてからと予想している。従って、3か月後の水準は現行の許容上限である0.5%程度と見込んでいる。



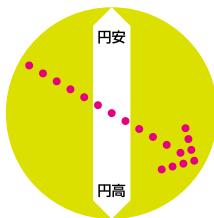
上野エコノミスト **上野 剛志**
うえの つよし | tueno@nli-research.co.jp

1998年日本生命保険相互会社入社、
2001年同財務審査部配属、
2007年日本経済研究センターへ派遣、
2008年米シンクタンク The Conference Boardへ派遣、
2009年ニッセイ基礎研究所。

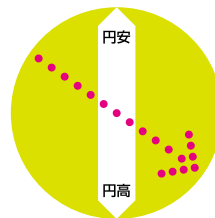


Market Karte

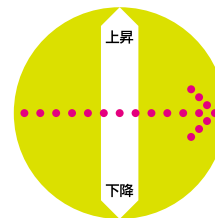
March 2023



ドル円・3か月後の見通し



ユーロ円・3か月後の見通し

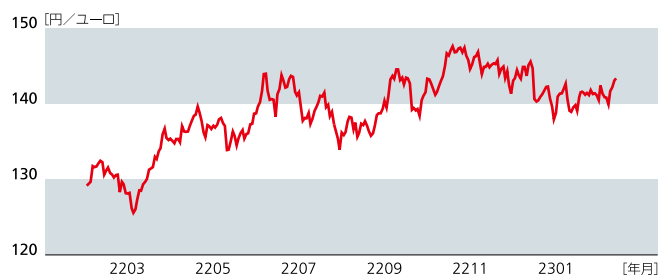


長期金利・3か月後の見通し

ドル円為替レートの推移 [直近1年] 資料:日本銀行



ユーロ円為替レートの推移 [直近1年] 資料:ECB



長期金利(10年国債利回り)の推移 [直近1年] 資料:日本証券業協会

